＜巻 頭 言＞

平成19年の年頭に当って

豊　田　高　司*

あけましておめでとうございます。

最近の日本の経済は安定的に推移しているものの，ダム建設の動きは低調で，ダム関連業界，当会議の会員各位にとりましても厳しい状況が続いていることと存じます。

しかし，従前からダム需要は小規模ながら続いているうえ，近年頻発している異常出水への対応，顕著になりつつある地球温暖化対策としては水力発電が最も効果的であること等新たなダムニーズの芽が生じつつあるように思われます。さらに，蓄積された数多くの既設ダムの再開発，メインテナンスニーズは増加するとみられることもあり，長期的視点からの希望を持って，厳しい現環境を乗り越える努力を続けて行って頂きたいと思います。

さて，当会議として，昨年は広報に力を入れました。ダムの役割を国民によく理解してもらおうと，会員が協力して「にっぽんダム物語」を書き，編集し，4,000部を出版し，多くの官庁，大学，高専，公立図書館，関連事業者等で読んでもらっています。

いずれ，世論からダム不用論が消え，必要なダムは造るという正論に立ち返ることが期待されます。

また，昨年は，国際会議にも積極的に貢献致しました。

６月にスペインのバルセロナで開催された国際大ダム会議（ICOLD）の大会へは，日本大ダム会議のメンバーが約100名参加しました。いつもは50名位ですので，日本の積極性を示せたと思います。

新たに発足した国際協力委員の方々も，各技術委員会で日本からの国際委員を助けて活躍してくれました。

さらに，10月に韓国で開催された東アジア地域ダム会議には約50

* ㈳日本大ダム会議 会長

名で参加し，主催国韓国の期待に答えることができました。引き続き中国で開かれた「国際シンポジウム・ハイドロパワー2006」にも代表団を送り中国との協力関係を密にすることができました。

本年も国際会議には積極的に臨みたいと考えています。そして，それが会員の皆様のお役に立つように工夫して行きたいと考えています。

すなわち，国際会議での論文発表，更に，プレゼンテイションは，各国の専門家に日本の技術を知ってもらう格好の機会であり，それを端緒としてその技術の海外展開，すなわち，会員企業の海外事業展開に結びつける可能性も十分考えられるところです。その面を積極的に支援しようと，海外で使われる可能性を有する技術を，論文として国際会議に提出することを積極的に支援することを始めたところです。特に，官公庁からの受託事業等で得られた技術，知見等で発表を憚っている場合等は当会議が関係機関との調整の労をとってゆく所存です。

今年は6月にロシアのサンクト・ペテルスブルクで国際大ダム会議の年次例会が開かれます。また10月には中国の成都で東アジア地域ダム会議が開催されますが，それらの会議に上記のタイプの論文が何本も提出されることを期待しています。

なお，10月の成都での会議については，そのテーマに日本側に技術的蓄積の多い既設ダムの再開発，ダムの環境対策を選定しております。また，会議後のスタデイツアーで日本側が強い興味を持っている，三峡ダムの次ぎのプロジェクトとして長江上流に建設中の大ダム群を訪問することにしてもらいましたので，多くの会員とご一緒したいと期待しています。

当会議は，国内でのダムが抱える課題についても，精力的に検討し，今後のあり方について技術的な提言等を行ってきております。

現在，ダムの土砂管理，再開発，IT技術，建設マネージメントといった4つのテーマに取り組んでおります。そのうち，再開発分については，本年5月を目途に，既設ダム有効利用のための設計・施工にかかる技術的課題とその対応策について取り纏め，会員各位の参考に供する所存です。

本年の事業が多くの成果を挙げられますよう，会員各位の積極的な協力をお願いいたします。